
だって、だいきらい。

苦古

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だって、だいきらい。

【Nコード】

N5830X

【作者名】

苦古

【あらすじ】

綺麗なドレスと、素敵なベール。左手に立つて優しくエスコートしてくれているのは、大好きなわたしの父さま。なのに、長く続く紅い絨毯を進んでいった先には……………あれ？+++++
++ そんなはずないです。……………だって彼は わたし
のことが、だいきらいなんですから。

白い扉が、目の前で開かれた。

次の瞬間、視界を滲ませた、溢れんばかりの光。

扉の向こうに広がる大きな空間を余すところなく満たすその光は、わたしが向き合っている正面　遙か高い天井から中央舞台の祭壇までを覆う、白と金を基調とした繊細なステンドグラスよりもたらされているもの。

神聖かつ典雅な華やぎを纏う陽光に目を眩ませつつも、わたし

ダフネは、懸命に灰色の瞳を瞬かせて、パール・グレイ扉の向こうを見渡した。慣れてきた視界の中で、像を結び始めたのは、人。

人、人、人の波。

神殿で一番大きな祭壇付きホールの空間を、扉から中央舞台に向かうまでの深紅の絨毯で線引きしたように分かれて居並ぶ、数え切れない人間たちが、一様にわたしを見つめていた。

大きく見開かれた千以上の瞳が、びくりと背筋を震わせたわたしの姿を映す。

思いもよらぬ光景に、何も考えず踏み込もうとしていた足が凍った。

（　　な、なに？　何ですか、コレは）

何の集会……いや、むしろ祭？

これほど大勢の人間がこんな朝っぱらから集まっているなんて、只事じゃない。

しかも、なんでみんな正装？

咲き誇る花々のようなドレスを纏った、品の良い貴婦人やうら若き乙女たち。隙なく宮廷着を着こんだ、凛々しい紳士たち。

とっておきのおめかしなのだろうか、きちんと整えられた服装で

どこか落ち着きなく、でも、何か楽しみで仕方がないものを待っている様子の子供たちの姿もある。

そんな大勢の人々の視線が、一斉に突き刺さり、思わず我が身を引いてしまった。

……もしかして、もしかしくとも、おじゃまする部屋を間違えちゃったんじゃない？……。

落ち着け、落ち着きなさい、わたし！

改めて正し直した姿勢で、きちんと前を向いたまま。且つ、迅速に。

背中に浮き始めた嫌な汗の存在を意識しつつも、この状況をどうにかするため、わたしの脳みそが活動を始める。

(と、とりあえずは……)

この場を一刻も早く脱するために、
相棒^{パートナー} たる隣の人間の意識を戻して差し上げることが先決だ。

さつきから、全然動かないところを見ると、わたしと同じように凍っちゃってるのかもしれない。

……どうにかしなければ！

ごくりと唾を呑みこんだわたしは、隣に立つその男^{ひと} いつになく上品な、紺を基調とした装いで身を包む、有能で博識、温厚、美形、美麗魔導士……とまあ、美点を上げれば奇跡の泉のごとく溢れ出す素敵男性^{ロマンス・グレイ}、もとい愛する父さまの上着の袖を、きゅっと握った。

いつも通り、一人娘たるわたしをエスコートしてくれていた紳士的な父さまの腕。

ああ、素敵。

それに絡めていた手で、控えめに小さく服の袖を引く。

ん……あれ？

……反応なし。

もう一度引っ張ってみたけれど。

……あれれ？

どうしたんでしょう。いつもなら、何でもすぐに気が付いてくださるのに。何と言っても、父さまは完璧でいらっしゃるから。

わたしはこっそりと、隣に立っている父さまを視線だけで仰ぎ見た。

「とうさ……」

“ま”まで言いかけた言葉を、思わず呑み込む。

「……………つく」

噛締められた唇から洩れる声。

ふるふると小刻みに揺れる、老いてなお頼もしいと、娘ながらに慕う肩。

皺が刻まれた目尻から、ぽろぽろと零れゆく父の涙を目前に、わたしは啞然とした。

（なんでお泣きになってるんですか、父さまあ　　！？）

滂沱のごとく涙を流す父。

いつも穏やかで優しい微笑みを浮かべているこの男が、こんなに泣いている姿を見るのなんて、わたしがまだ幼い頃に亡くなった、母の葬儀のとき以来じゃないでしょうか。

正直、大の大人（しかも初老男性）に、ここまで盛大に泣かれると……いくら素敵父さまであるとはいえ、ちよつと怖い。

どうしたというのでしょうか。

……そう言えば最近、少し情緒不安定でいらしたみたいだけれど、気が付けば、どこか悲しそうな顔でわたしを見つめていた父さま。「なあに？　どうかしました？」

そう訊ねれば、何でもないよと弱々しく笑んで、切な気な吐息を吐いていた。

昨夜なんて、特に酷かった。彼女の顔を見るだけで、口元をふるさせたりして……。

そこまで考え、わたしははっと息を止めた。

（まさか、ご病気！？）

真っ青な顔色に、謎の痙攣、そして世を儚んだような吐息……。

そんな、そんなの嫌です。

父さまは、わたしの唯一の大切な家族なのに！

「と、とうさま？」

わたしと同じ色をした父さまの瞳に、泣きそうに歪んだわたしの顔が映り込む。そんなわたしを、父さまはしみじみといった様子で眺め……、

「いこうか、ダフネ」

柔らかくて、温かい微笑み。

白い手袋をした大きな手の平で、腕に掛ったわたしの手を優しく握ってくれた。

「は、はい」

反射的にこくりと頷いて、ぐつと涙を堪える。

そうです、いまはまず今日の目的　父さまの大事な用事とやらを終えてしまわねば。

わたしは、ホールの中へと進み出した父さまに連れられて、赤い絨毯を純白の靴で一歩踏んだ。

その瞬間、聖堂内に居並ぶ人々の間から、一斉に漏れ聞こえた様々な吐息。

それらは石造りのドーム型天井に反響して、小さな音の嵐を生んだ。

口の中から、バクバクと波打つ心臓が、バイーンとばかりに飛び出しそうになる。

（　　何！？　わたし、どこか変でした??）

でも、何もみんなして、一斉に呆れた溜息を吐くことないじゃないですかっ！　傷つくでしょう、泣いちゃいますよ!?

ビクついたわたしは、いつもよりたつぷりとしたドレスのスカート裾を、思わず踏み付けてしまった。

「っきゃ！」

転びそうになって、微かに悲鳴を洩らしてしまったけれど、父さまが素敵に華麗に素早く支えてくれたので、何とか姿勢を立て直す。

さすが、父さま。

わたしたちはちらりと視線を合わせて、にっこりとお互いに笑みを交わした。

そしてその時、背後からそっと掛けられた、しっとりとした低めの声。

「大丈夫？ 気をつけてね、ダフネ」

視線だけで振り返り、優しい気づかいをくれたその人にも、わたしは笑みを送った。

「はい。ありがとうございます、アルテミス」

こそそとしたお礼の呟きに、滝のようなまっすぐな銀月色の髪を揺らして微笑みを返してくれたのは、大切なわたしの大親友。

付き添いで同行してくれている彼女も、こんな状況に突然陥ってしまったて驚いているだろうに、それを面に出すこともなく冷静そのものだ。こちらにも、さすがアルテミス。

世界の至宝、月の女神、と名高い美女中の美女たる彼女は、この大国でも有数の才媛として薫進的に活躍している素晴らしい女性で、大好きな友人であるだけでなく、わたしの憧れでもある。

学生時代の知り合い曰く、わたしなんかが彼女の友達で居続けていることは、学園26不思議の一つに値するとか。……他に25個もあるんだったら、わたしの1つ分くらい見逃して、そっとしておいて欲しいものだ。

その女神の如き親友が、わたしが今着ているドレスの背後の裾を、すんなりとした白皙の細腕に掛けるようにして持ち上げてくれた。

彼女が今日、付き添いとして来てくれた理由は、まさにこれのせい。

真っ白な粉雪色の布をふんだんに使った、豪華でいて品のある、ついでに半端ない重量もあるこのドレス。

（やっぱり、こんなドレス……わたしには似会いません）

この、ふんだんに惜しげもなく使われた高級布の量！ スカートの後ろ部分だけで、わたしの普段着が10着は仕立てられそうだ。

総額いくらだったんですか、とプレゼントしてくれた父さまに聞いてみたいけれど……出来ない、怖すぎて。

何より、高価な品すぎて分不相応だという以前に、良くとって並程度の容姿のわたしには、全く似合っていないと、悲しいまでにはつきりと断言できる。

それこそ、アルテミスだったらステキに完璧に着こなせるに違いないのに。……何でわたし？ 何かの罰ゲームにでも合っている気分です、全く。

いつもは足元までストンと落ちるだけの魔道院の長衣しか着ないから、剥き出しの肩や背中が気になって仕方がない。それならと、アルテミスが薄いベールを頭からすっぽりと被せてくれなかったら、きつと恥ずかしくて外に出られなかっただろう。

ああ、散りばめられた小さな宝石たちが目に痛い。

でも、父さまが言う今日の 用事 には、どうしてもこの服じゃなきゃって、父さまとアルテミスが二人揃って言うものだから……

……はあ。

そこまで考えたところで、聖堂いっぱいに重厚な音色が響き渡った。

その音が、あまりに唐突かつ大音量で空気を震わせたものだから、臆病なわたしはまたもや全身でビクついてしまった。

これは……バイブ・オルガン 気鳴鍵盤楽器？

心を落ち着けて耳にすれば、低音から高音、多種多様な音階が整然たる嵐を為すかの如く波打ち、身体の奥を震わせる音の重なりを生んでいて……まあ、簡単に言うと、とっても壮麗で綺麗な音。

今まであまり聞く機会に恵まれなかったので、こんな状況でもちよつと嬉しくなった。

だけれど、おかしいとも思う。

これは、確か重要な儀式のときにしか演奏されないはずなのに。ほんとに、これは何事なのかと、聖堂中をもつとよく観察したくてたまらないのだけれど、衆人環視の中できよろきよろするのは、

とてもはしたないことなのでご法度だ。父さまやアルテミスに恥をかかせるわけにはいかない。

重厚な楽音のなか、父さまの腕に手を絡めたわたしは、一步一步ゆつくりと、父さまの歩みに合わせて歩む。

刺すような周囲の視線から逃れるように、ひたすら視線を俯ける。だから、揺れるベール越しに見えているのは、紅い絨毯の色だけ。いつの間にか、わたしは無意識に、唇を強く噛締めていた。

（いやだな……）

この色の上を歩くのは、嫌。

…… 19歳にもなつて、こんなこと言うなんて、子供っぽい？

べつに、そう思われたっていい。

紅色は、わたしが一番だいきらいな色。

この色だつて、きつとわたしのことが嫌いなはず。

だつて、これはあのひとの色なのなもの。

行く先に聳え立つステンド・グラスからの眩い光が、濃い紅色を徐々に明るく鮮やかに染め上げていくのを、無感動な瞳に映しながら、ただひたすらに父さまに寄り添う。

余裕がなくて気が付かなかったけれど、紺色の上着の袖に添えた手には、知らず知らずの内に、力が入ってしまったていらしい。

強張ったわたしの手 今朝、ドレスに合わせて選んだといつて父さまから贈られた、白い編地レースの手袋に包まれたわたしの手に、温かくて大きな、優しい手の平が重ねられる。

…… ああ。

まるで溶かされたように、手袋の下で血の気を失うほど固く握りしめていた拳が緩み、少しでもくしゃくしゃになってしまった父さまの上着の生地からほどけていく。

「ダフネ」

低くて慈愛に満ちた、父さまの声。

いつの間にか、わたしたちは歩みを止めていた。

入口から見れば、あんなに長いと感じられていたはずの紅色の道

がいつの間にか終り、光包まれる祭壇舞台へと続く階段の前で、わたしはわたしを見下ろす父さまと向かい合っている。

「父さま……？」

わたしの不安に満ちた問いかけには答えず、父さまは笑んだまま、自らの腕に未だ添えられたままだったわたしの手を、ゆっくりと、両手とも持ち上げた。

広い父さまの胸の前に、一つに集めるようにして包み込まれた、わたしの両手。

手の平で大切そうに包んだ娘の指に、父さまはキスを一つ落した。
「私のダフネ」

幼い頃から変わらない、甘やかしきつた口調。

家でならともかく、こんなに大勢の前で口付けた父に、ぎよつとした表情を隠せなかったわたしは、次の言葉で更なる混乱をきたした。

「幸せに、なるんだよ」

.....
.....
.....はい？

「え、えと、あの、父さま？」

どういう意味ですか？

何ゆえに、ここでその言葉？

今の状況で、そんな台詞が出て来る意味が、わたしにはちょっと……。

ここはひとつ、「父様の娘に生まれることが出来て、今でもじゅうぶん幸せですが」と、ちゃんと伝えておくべきなのだろうか。むむむ。

そう、つらつらと悩み込んでいると、わたしを慈しみに満ちた目で見つめていた父さまの視線が、ふと、横に逸らされた。

なに？

なにがあるのですか？

父さまにつられるように、わたしも同じ方向を　祭壇へと続く階段の裾の方を、見る。

「　　」

心音が、全身を震わせた。

たぶんきつと、一瞬、心臓が止まってしまったに違いない。それくらいの衝撃。

瞬間的に凍りついたかのような身体中の血液が、今度は冷たさを伴って、煩い雑音を立てながら駆け廻り始める。

みるみる冷えていく指先。

感覚が無くなったそのわたしの右手が、父さまの手によって運ばれていく。それを、わたしは動かない感情のまま、唯ただ信じられない思いで瞳に映していた。

やがて、真っ直ぐに差し出された、編地に包まれたわたしの手。

「この子を、よろしく頼む」

その父さまの一言に、紅の下で青ざめているであろう唇がわなな

くのを、わたしは押し隠せなかった。

（こんなの　　うそです）

そう、性質の悪い嘘。そうに決まっている。

だから、こんな　　、

「はい」

応えがあるとともに、父さまの掌から下ろされていく、わたしの手。

祝福の光溢れる祭壇へと続く、階の袂。

白い陽光の中に差し出されたその人の手は、わたしの小さな手の平を、自らのそれで柔らかく受け止めた。

「　　うそ……」

温かさを失った己の唇が、震えを帯びたその一言を擦れた音として紡ぐのを、どこか遠くで耳にしたかのように聞いた。

光に慣れた視界。

天上から降り注ぐ白光の世界の中で、一つの鮮烈な色彩に、否応なく目を奪われる。

神世に存在するという聖なる焰の如き、純粹で、穢れのない一色

紅。

何者をも薙ぎ払うかのような　苛烈の紅　の彩。

その煌めきを宿した髪を持つ人。

白皙の肌と彫り深い貌の造作は神懸かりなまでに麗しく、気品に満ちてはいるが、感嘆を洩らさずにはいられないほど凜々しくもあり、決して男性らしい印象を損なうものではない。

わたしは、知っている。

ずっと前から、この男を。^{ひと}

まるで、烈火を纏う太陽神のような、この男を。^{ひと}

襟足で短めに整えられた緩く波打つ髪とは異なり、少々長めに取られた前髪の陰からわたしを見据える、鋭い金の瞳も。

この世から掻き消えてしまいたい、そう何度もわたしに思わせた、冷徹な言葉しか吐き捨てない口唇も。

美しい

認めたくない、目にしたくなんてない、だけど…

…美しい……。

その、彼の手の平に添え置かれた、わたしの手。

なんの冗談なのでしょう、これは。

微かに震えて鳴る奥歯の音だけが、いやに頭に響く。それでも、麻痺したわたしの脳は、のろのろと思考を始めた。

あれ？

（なぜ、このひとは白い服を着ているのでしょうか？）

混じり気ない純白の糸で織り上げられた、多分、最高級であろう衣裳。典雅でいて、神聖さを帯びたその衣は、寸分の狂いなく、彼の長身をすつきりと覆っている。

彼の容姿、身分に相応しい衣裳。

今日、この場を集っている大勢の乙女たちの甘やかな吐息を洗いざらい受けたことは、想像に難くない。

たとえ、彼がわたしにとって怖れの塊のような存在であっても、それだけは分かる。

わたしを射抜くように注がれる金色の視線、痛みを感じるほどのそれに怯えている今この時だって、それくらいのこととは想像できる目を、合わせたくない。うろつくと彷徨う、わたしの視線。だけど、彼の胸元を飾る それ を見つけた瞬間。

豪華な、粉雪色のドレス。

丁寧に施された、初々しさを煽る化粧。

光の糸で紡いだかのように美しく軽やかな、全身を覆うベール。常では奏でられない、祝福の気鳴鍵盤楽器。

父から贈られた、繊細な編地の手袋。

気が付いてしまった。

分かってしまった、全部。

……ああ、でも、そんなことって。

背筋に、一気に怖気が走る。

まるで人ごとののように眺めていたその光景から、意識が急激に現実へと引き戻された。

そして、彼の傍にいるときに、いつも沸き起こってくる、あの衝動。

逃げなきゃ。

無意識に示される、魂にまで刷り込まれているんじゃないかと思うほどの、逃げなければという強い思い。

早く、早く、早く！

身を翻し、ドレスの裾をたくし上げ、全力で入口の扉まで走ればいい。

わたしがこの場を飛び出しても、父さまとアルテミスなら、きっと許してくれる。

残されたあとの人たちなんて……彼のことなんて、どうなろうと知らない。

ずっとそうやって逃げてきた。

小さな子供の頃から、ずっとずっと。

身体が、意識よりも一步早く反応する。

彼の手の平に委ねられた、わたしの手。わたしたちを繋ぐところ、象徴にも見えるおぞましいそれ。

（ いやっ ）

背筋を震わせたわたしは、断ち切るように腕を引き

「逃がさない」

指先が離れかけた瞬間、囚われた手。

逃がさないと言っただけの言葉通り、戒めのようにきつく握り締められた。

痛い！

走った痛み思わず顔を歪めた時、そのままぐいと腕を引っ張られる。

バランスを崩しかけたわたしの腰に手を添えた彼は、そのままわたしを自分の胸元に抱き寄せた。

……しまった、隙を突かれてしまった。

まあ、彼とわたしとは、重ねた経験値が違いすぎるので、仕方ないと言えばそれまでなのだけれど。

悔しさと怖ろしさを必死に殺しながら、わたしは唇を噛んで視線を俯ける。

大体、抵抗する間も与えず、難なくこういう動作をこなしてしまうあたりから、彼が女性慣れしているのだという事実が窺えるというものだ。

なんて破廉恥な男。

このっ、乙女の敵！

……そんなこと、口が裂けたって言えないけれど。

でも、なによりわたしを絶望させたのは、ホール全体で輪唱を奏でた感嘆の吐息だ。たぶん、鈍臭くも倒れそうになったわたしの身体を支えたかのように、周囲の目には映ったのだろう。

まんまと騙されているこの場の皆さんが、そこはかとなく憎い！

……あ、父さまとアルテミスは別だけれど。

誰も、いまのわたしの心に気付いてなんてくれない。助けてもくれない。

……もう、いや。

逃げたい。

この男の傍^{ひと}になんて、居たくないのに。
なのに……。

「逃げるなんて、絶対に許さないからな」

耳朶に注ぎ込まれた言葉。

彼の体温を持った吐息が、直に耳元に掛り、わたしは声無き悲鳴を上げた。

怖い、怖い怖い怖い、怖すぎる！

だけど、足に力が思うように入らない。

抵抗の力を奪われ、へにやりと崩れかけたわたしを、何を思っているのか、彼は一瞬だけ抱きしめた。

むぎゆっ、と彼の純白の衣裳の胸元で頬を潰されながら、絶望的な心境でわたしが目に映したのは、彼の胸元に飾られた花飾り。

愛の花、と呼ばれるプリア・モーナの花を中心に、特殊な意匠で様々な花を組み合わせたその胸飾りを、この国の女の子なら、誰もが一度は夢に見る。

いつか、大好きな男性が、自分のためにこの花飾りを付け、迎えに来てくれたらと。

そう　間違ってても、「自分を嫌っている男性」が、ではなく。

「来い、ダフネ」

やや乱暴にわたしの身体を押し離れた彼は、小さな声で素早く命令してきた。

それに対し、わたしは了承の言葉を発することはおろか、微かな頷きすら返していない。

なのに、さつと背を向けた彼は、繋がれたままの手を力任せに引っ張り、足早に階段の方へと進んでいく。

祭壇へと続く、真つ白な石の階段。

長く続くそれを引き摺られるようにして登りながら、わたしは息苦しさに喘いだ。

ドレスが重い。

さっきまでドレスの裾を持ってくれていたアルテミスは、下に残ってしまった。

歩くのが早い。

父さまなら、もっとゆっくり足を進めて、わたしに合わせてくれるのに。

思いやりも気遣いもなく、ただ己が意思のままに前に行く紅い髪を持った後ろ姿を、いままで怖ろしさに身を震わせるだけだったわたしは、この時になって初めて睨んだ。

もう嫌だ。

離して。

逃げさせて。

これ以上、わたしを傷つけないで。

そう、叫びたいのに。

泣いてしまいたいのに。

(　　)　　こんなのって、ないですよ

もう、さすがに分かっている。

このドレスの意味も、ベールの意味も、彼が胸に付けた花飾りの意味も、全部。

本人　花嫁であるわたしに、当日……いや、その瞬間まで知らされない華燭の典なんて、聞いたことがないけれど。

でも、何故？

どうしてわたしなの？

何でかなんて、わからない。想像もつかない。

どうして、だなんて……そんなこと、訊けるはずもない。

だって、わたしは

、

彼が、『大嫌い』な女の子のはずで。

だから、わたしも

、

彼のことが、『大嫌い』なのだから。

……ああ、本当になんて茶番。

なぜ、わたしはこんな晴れの場所に、彼と並んで立っているのでしょうか？

いまわたしが立っているのは、白金色の光に包まれた祭壇の目前。

大いなる父神様。

わたし、貴方様の御威光に逆らうようなことを、何かいたしましたでしょうか？

地味で取り柄もない小娘らしく、大人しやかに暮らしていたはずなのに、何故このような仕打ちをなさるのでしょう。

……いま思い返せば、怪しげな前兆はいくらでもあったのに。

何も知らされていなかったとはいえ、ここまで御膳立てされてるんだから、何か察知すべきだった。

ここまでされて、どうして気付かないんですか、わたし！

+ + + + + + + + +

わたしの国には、伝説がある。
大地に降り立った一人の神の物語と人間の乙女の物語。

世界創世より、幾千年を経た時代のこと。

天上界、地上界、地底界の3界を治める全知全能の父神の命により、邪竜を倒さんがため人の世を訪れた青年神は、戦いで負った傷を癒し、介抱してくれた心優しい人の娘と出会い　そして、恋に落ちた。

創造の眷族である神と、創られしものである人との恋。
それが、禁忌であると互いに知っていても。

神である青年は、彼女を伴侶とし、天で暮らすことを望んだ。
しかし、人の身である娘が清浄なる天上界に昇ることを、父神は赦さず。

青年神は父の赦しを乞うため、乙女を伴い旅をした。

長い旅だった。

時には辛く、時には危険に晒され。
だが、共にゆく娘の笑顔があれば、怖れるものは何も無かった。

やがて辿りついた、神世に最も近いとされていた険しい山の頂き。
娘とともに跪き、青年神は祈った。

自らが天に還ることが出来なくても構わない。
だがどうか、二人とともに生きることを赦して欲しいと。
あなたにだけは、それを認めて欲しいと。

娘を愛する青年神は、父神のことをも敬い、愛していたのだから。

父神は泣いた。

愛する勇敢な息子。

彼とその伴侶が旅する姿を、父神はずっと見守っていた。

その旅の間中、絶え間なく繋がれていた、二人の手。

どんなに険しい路でも、悪天候に晒されようと、離されることなく繋がれていた手は、まるで互いを護り、慈しんでいるようで。

そんな二人を見ていた父神は、いつしか怒りを解いていた。

かわいい二人を呼び戻し、手元に置きたい。

だが、全てを統べる大神たる自分が、理を覆すことは出来ない。

「ならば、条件を一つ」

父神は、息子と人の娘に、美しい鏡を与えた。

この鏡は、神世と映し世を繋ぐ水鏡。

年に数度、この頂きにて鏡を用い、お前たちの軌跡を我に語れ。
それが約束出来るならば、お前たちの道幸を見守ろう。と。

息子である神とその妻となった乙女は、父神との約束を守った。

二人が山の裾野に住まいを持ち、穏やかな日々を送るうち、彼らを慕った人々が集まって居を構えはじめ、それはやがて町となり、国と成った。

神から人へ、人から王へ。

大勢の人間に忠誠を誓われ、主と傳かれるようになって、神である夫と妃になった女は、終生、父神との約束を違えたりなどしな

かった。

二人が生を終えた刻^{とき}より、約二千年。

山の頂に聳え立つ白亜の天宮では、いまでも彼の神^かの末裔たる王族が始祖の父たる大神との会合を為し、この国に加護と祝福をもたらしているという。

+ + + + + + + + +

(っ て話、結構好きだったんですけど)

建国神話として語り継がれているこの話は、絵本どころか学院の初等科で使う教科書にも載っている、有名な物語。

堅苦しい歴史の授業の中、一番はじめに習うこの国の王朝史だ。とはいえ、その本質は恋物語なわけで。

授業中や休み時間に、同級生の女の子たちが頬を赤くして、きやあきやあとはしゃいでいた例に漏れず、わたしだって、なんて素敵なお話なんだろうと、うつとりしながら懂れたものだ。

大好きなひとが、一番大切なひとに逆らってまで、自分の手を引き歩んでくれる。

世界中で一番大好きなひとが、ずっと自分の手を 。

(羨ましい……いいな、そんなひとがいてくれて)

父さまのように凄腕の魔術師でもない、アルテミスのような美人

でもない、なんの取り柄もないわたしじゃ、そんな夢みたいなこと望めやしないけど。

それでも、憧れることは誰だって自由だと思っていたから。

でも、今日でこのお話のこと、好きじゃなくなったかも。

だって、だって……。

（なんで手を繋いで旅なんかしちゃったんですかーッ!? 始祖さま ツー!）

そんなことしちゃうから。

いま、わたし、こんな目にあっちゃってるんですよおおおおおっ！

婚礼の儀式。

女の子が夢見る、人生の一大イベント。

この国では、創世の神話になぞらえて、いろんな決まりが定められている。

たとえば……。

『1つ、父神に会いに行った始祖たちに倣い、純白の衣裳で望むこと』

『2つ、祭壇は険しき霊山を模し、長く高い台の上に設すること』

そして、3つめは、

(……………う、うう……………)

ダラダラと流れ続ける汗を背に感じながら、わたしは齒噛みした。長い階段を登り終え、ようやくたどり着いた舞台上。

壮麗な設えの祭壇に見惚れる暇もなく、上でわたしたちを待ち構えていたのは、何やらやたら位の高そうな法衣を身に纏った5人のおじい様神官たちだった。

彼らはまるでわたしの逃亡を阻止するかの如く、円陣状にわたしと彼を取り囲み始める。

完璧に布かれた、ひどく狭い包囲網。

彼らの異様に素早い動きに度肝を抜かれ、逃げ出すタイミングを失ってしまったわたしを余所に、5人は声を張り上げ、朗々と聖句を謳い始める。

……………これは、一体何の拷問なのでしょう。

おじいさん神官たちもさることながら。

いまこの瞬間、この場を現世の悪夢へと変質させている、その象徴の最たるものを見下ろしながら、わたしは頭の中で悶えた。

実際には、ただ凍りついたまま立っているだけなのだけれど。

隣に立つ人間にきつく握り締められた、わたしの右手。

これが、3つめの定め。

『花婿と花嫁は、式の間中、手を繋ぐ』

当然、これも始祖様たちの旅を真似したものでして、ええ。

つまり、今わたしがこういう事態に陥っているのは全部、始祖様たちが旅のあいだ所構わず、バカッフル振りをひけらかしてくださったせいだと云えるわけだ。

……いえ、わかつてますよ？ 八つ当たりだってことぐらい。

でも、でもですよ。自分たちのイチヤ付き振りが、後世において儀礼化されるなんて夢にも思わなかったんでしょうが、それにしたって、もう少し慎ましやかな交際が出来なかったのかと、ここは強く問うべきだろう。

（だいたい、婚前の男女が、人前でベタベタするなんて不潔ですよ、不潔っ！）

未成年の交際は、清らかであるべきなんですよ！？

なんて。

まあ、心の内側で誰かを非難してみても、それを表に出すことが出来ない小心者が、わたしという人間なわけで……。

（って、自分の小心振りに大人しく絶望してる場合じゃありませんでした）

いま、直面している問題を、きちんと直視しなければ！

わたしは繋がれた手元から、わたしをここまで罪人のように引立ててきた男へと、本人には決してばれませんようにと強く祈りながら、恐るおそる視線を移した。

その間、「あー、入口の扉が開いてからの記憶が、錯覚とか幻覚だったりで片付いてくれませんかー……」などと、往生際悪く夢見たりもしたのだが。

結局は、希望を打ち砕かれ、がっくりと肩を落とす羽目になっただけだった。

……隣に立っているのは、どう目を眇め直して確認しても、やっぱり彼に間違い無さそうで。

ヘリオス・アポロン・オリュンポス。

神の末裔たる我が国の王家・オリュンポスの第2王子にして、
太陽神 の異名を冠する我が国切つての炎術魔導士。

それが、この男^{ひと}。

わたしを、だいきらいなひと。

+ + + + + + + + + +

現王クロノスの第4子として生を受けたヘリオスは、神に連なる
血筋にあつても稀であるほどの 大^{キフト}なる祝福 を授けられた人間
だった。

家柄最上、容姿端麗、おまけに頭脳も明晰。

見事に王道三拍子を備えていたものだから当然、子供の頃から目
立ち際立^{きわ}つことこの上ない存在で、いつもみんなの注目の的だった。
神様も彼のファンだったのかは、まさに「神のみぞ知る」
だけれど、どうやら武術と魔術の才能までお与えになったことは確
かなよう。

わたしと同一年であるにも関わらず、いまや、我が国の四大軍^{しだいぐん}の
一翼・炎帝魔導軍を統べる若き將軍として大陸中に名を馳せており、

その実力や否や、戦場に於いて彼と対峙した者が皆、煉獄の向こうに垣間見える死に恐怖する程なのとか。

恐ろしく魅惑的な外見と身分、高い能力と実績に魅せられた人々は数知れず。

特に、女性に関しては言わずもがな。

まあ、これだけの最上級エリート物件を、絶賛恋人募集中の看板を背負ったお年頃のみなさんが放っておくわけもなく。……おまけにどうやら、ヘリオス自身、来る者拒まずの精神に則って人生を謳歌しているようで。

これまでに聞かされてきた彼に関する色恋沙汰の浮世話は、天の河に煌めく星の数ほど。

噂話に疎いわたしの耳にもあれだけ入って来ていたのだから、きっと実際はもつとすごいことになっているのだと思う。

（そんな男と結婚！？ 冗談じゃないですよおおおうつ）

そんなの嫌だ、嫌過ぎる。

このままでは、その悪夢が未来となってしまう事実、わたしは怖れ慄いた。

わたしの理想の花婿様 それは、母さまを一途に思い続けている父さまのような、優しい素敵男性。

完璧な容姿や家柄、特別な才能なんていない。

女性にルーズなだけでなく、わたしを蔑んでいる人なんて、問題外。

わたしのことを、ちゃんと想ってくれる人。

ヘリオスとは対極に位置する男性が、わたしの理想なのだ。

なのに……なんでわたしが彼の花嫁？

何がなんで、そんなことに？

何も知らされず、だまし討ちみたいに連れて来られた拳句いきなり結婚だなんて、こんなの酷過ぎる。納得なんて出来ない。

……それに、

『逃がさない』

そう言ったのは、彼。

何の冗談？ 本気でそう思う。

わたしを捕えて、一体、貴方になんの益があるというのだろうか。

ヘリオスの花嫁になりたい女の子はたくさんいる。

彼が望めば、きっと誰だって手に入るだろう。顔かない娘なんていないはずだ。

だけど、わたしは違う。

彼がわたしを望むなんて、そんなことは絶対じゃない。

（だって、あなたは、わたしのことを嫌っているじゃないですか）
彼がわたしと婚姻を結んで得られるものなんて、何もないのに……。

婚礼の定めにより、二人を結び繋いでいる、手。

本気で、わたしを逃がさないつもりなのだろうか。

（はやく、嘘だと言って）

その方が、お互いのためでしょう？

今なら、このおじいさん神官たちも赦して下さいますって！

繋ぐだけでなく、根元まで深く絡め取られた指。束縛するようにわたしを捕えるヘリオスの左手を見つめながら、必死でそう願いつけているのに、その瞬間は未だ訪れない。

込められた力が強すぎて、手が痛い。

そもそも、手の大きさや骨格の形がこんなにも違うのだ。無理に絡めた拳句握り込まれているせいで、わたしの指の骨は折れそうなまでに軋んでいる。

もしも彼が、大嫌いなわたしの手を複雑骨折させたいとお望みな
のならば、もうすぐ達成されるであろうことを、ぜひお知らせした
いところだ。

血が廻らないせいなのか、緊張と恐怖のせいなのかは分からない
けれど、指先が冷たくなってしまうていて、もう感覚だって無いし。
……というか、本気で痛いんですって！

（勘弁してください、離してください。ていうか、むしろ触らな
いでくださいっ！）

隣の男に、毅然とした態度でそれを訴えるべきなのだろうが……
いかんせん、恐ろしすぎて。

だって、煉獄の炎術魔導士ですよ？

炎で一瞬にして大軍を消し炭にしちゃうんですよ！？

そんなひとに楯突くなんて真似は出来ない。ぜったい無理、無理
！。

（血が止まって指が壊死したら、アルテミスに治癒してもらわなき
やですね）

そして治療が終わり次第、全力で国外に逃亡しよう。

今直面している苦痛に満ちた現実から少しでも遠ざかりたくて、
わたしは隣の男から逃げ切るという幸せな未来に向けて意識を飛ば
した。

前向きなんだか、後ろ向きなんだか、自分でももう分からない。
いつそ誰か、そつと箱にでも詰めてここから運び出したあと、誰
の目にも留まらない薄暗い倉庫にでも仕舞い込んでくれたらいいの
に、だなんてことも考えたりする。

ああ……今日はわたしと父さま、そしてアルテミスの三
人で、楽しい休暇を過ごすはずが……。

それがどうしてこんなことに。
せめて、こんな所にこんな恰好で来なければ回避できたのでは…

…と考えたところで、今日わたしをこの地獄のような空間まで連れて来た最愛の父と、親愛なる親友の笑顔が、脳裏にぱっと浮かんで消えた。

(……いやいや、そんな。あの二人がわたしを陥れるなんて、そんなことあるはずが……)

一応否定はしてみるけれど……たぶん、そうなんでしょうねー。

今さらながらその事実^{じじつ}に思い至り、ずーん、とばかりにどん底まで沈んでしまった精神^{しんしん}。

これ以上考えていると人間不信になりそうなので、思考を強制終了させる。

どうしよう。現実逃避で気を紛らわせるつもりだったのに、逃げる願望をますます強めてしまった。

ううっ。さつきから、胃がひどく痛い。

それに、心なしか、頭だつてくらくらしてきたような。

(ここで倒れたら、見逃してくれたたりするでしょうか?)

名案かもしれない　そう考え、一瞬だけ実行してみようかと思っただけれど、止めた。

もし仮にそんな迷惑をかけたりすれば、後でどんな仕打ちを受けることが……。

目の前の祭壇を薪代わりに、骨の髄まで燃やし尽くされてしまうかもしれない、などという有り得なくもない物騒な想像が脳裏を駆け廻り、今度は吐き気を催してしまう。

ああ、こんななのに結婚だなんて、本当にありえない。

怖い、彼が怖い。

平気でわたしを傷付けてばかりいる彼が、恐ろしくて堪らない。

彼を目の前にして、平常心で笑っていられたことなど、今まで一度もない。

そう、あの日。

初めて出逢ったあの日から、ずっと。

『

見下げた屑だな、お前』

世にも美しい声で言い放たれた、忘れられない呪詛。

(……ああ、思い出すんじゃ無かったです)

02（前書き）

Side Daphne

11/9 誤字訂正いたしました。ご指摘くださったお方さま、
ありがとうございます！何かまた間違いがございましたら、
宜しく願います

春の花々が最期の花びらを落とし、木々が一斉に透き通る緑の葉を
茂らせ始めた季節。

エメラルド色を宿した世界は、あんなにも美しく輝いていたのに。

彼と出会った日。

それは、わたしにとって、最悪の日だった。

+ + + + + + + +

高い高い、私の背の何倍もある門柱。

壮麗かつ繊細に絡み合う流線を持つてして形作られたアーチを見
上げながら潜り、わたしはいつものように門柱のすぐ横、さっきま
でいた敷地を一面に囲む煉瓦塀に背を預けた。

ふう、と一息吐いて足元に視線を下ろす。

目に入っただのは、ぴかぴかと真新しい黒のベルト靴と、灰色の石
畳に広がる透明な水溜り。

（わあ、きれいです）

陽光を弾く水面の上を、黄緑色の小さな葉っぱが船みたいにプカプカ流れる。

その様に、口元を緩めかけたところで、はっとした。

慌てて赤い煉瓦塀から背中を離れたが、時すでに遅し。

「うう、きもちわるいー」

……今日の午後の授業中、雨が降っていたことをすっかり忘れていた。

今は白い綿飴のような雲が真つ青な空に幾つか浮かんでいるだけで、とてもいい天気なのだけど、門の側の花壇や通りの並木、建物や地面は雨水で濡れたままで。

（せいふく……母さまが、せつかくきれいにしてくれたばかりなのに）

制服の背中に出来た大きな染みを撫でながら、哀しくなったわたしは表情をくしゃりと歪めた。

その年の春、当時5歳だったわたしは、たった今くぐった門の向こう側に広がる学園、パルナツソス魔導学園に入学したばかりだった。

古来より、わたしが生まれたこの国は神々との縁が他国より強く、その恩恵を血という形で受けているためか、強い魔力を持って生まれる者が多い。

長い歴史の中、この大陸の大地で幾つもの国が次々と生まれ、戦いに明け暮れ滅んでいく中、わたしの祖国は魔導大国として発展すること、その地位を揺るがんものとしてきた。

魔の導きたる智^ちは、剣。

誉れ寄せし根源たる力^ちは、盾。

長い刻^{とき}で培った魔導の智も、それを扱う力を持つ者が無ければ、古い紙に描き付けられた、ただの落書きと同じ。

そして残酷なことに、魔導の才というものは、この世に生を受けた瞬間に天によって定められている。

というわけで。

「魔術を使える人間をいち早く把握し、未来の礎となる魔導士候補を余さず洩らさずゲットしよう！」というスローガンの下、この国ではすべての生後間もない赤子に対し魔導測定を行うこと、という法律が定められている。

わたしもちろん、生まれて間もなくその判定儀式を受け、結果、幸運にも一定基準以上の魔力を有していると認められた。

そしてめでたく今春。

規定通り5つの歳に、魔導士の名門校　国立パルナツソス魔導学園の初等部に入学出来たというわけだった。

「おめでとう、ダフネちゃん。とってもよく似合ってるわ」

一月前の入学式の日、そう言って微笑んでくれた母さま。その笑顔を思い返しながら、わたしは自分が身に着けている白い学園制服を見下ろした。

胸元より少し下で切り返されたワンピースの女子制服。後部分の布を四角く大きく取った、後ろに垂れさがる襟が特徴的

で、装飾は襟縁と袖縁に縫いつけられた細い黒のリボン、左胸の園章、前で結ぶ帯状の黒い装飾布だけという、実にシンプルなものだ。『白くて清楚』が、この制服を起用した学園側のコンセプト。

でも、白い布地は汚れが目立つ。古来より、子供が服を汚すのは、覆らない一種の真理のようなもので……うう。

（きょうも「よごしてしまいました」っていったら、母さまはがっかりなさるでしょうか……）

きのうは、校庭で転んだ拍子に花壇に突っ込んで、制服を泥だらけにしてしまった。

毎日毎日、同じように服を汚すわたしに、母さまは呆れてしまわれるかもしれません。

ああ、でも。

『いいのよ、ダフネちゃん。お洋服を汚すのは、子供の大切なお仕事だもの。それより、転んだときに怪我はしなかった？』

昨日、学園から帰ったわたしを出迎えた母さまはそう微笑って、真っ黒になった制服ごと、わたしを抱きしめてくれた。

（だいじょうぶ。これは、きょうの『たいせつなおしごと』ぶんです）

膝丈のスカートのプリーツ。母さまが毎日欠かさずアイロンを綺麗に当ててくださっているそれを、さっと手で払って整え、わたしは気合いとともに鼻から「ふんッ」と息を出した。

今日、帰ったら

（母さまに、おせんたくのしかたをおしえていただきましょう）

花の香りがする母さま特製の洗剤粉を使って、みるみる洋服を綺麗にしていく魔法の手。

たくさんのお泡の中で働くその優しい手をみるのが、わたしはとても好きだった。

（わたしのでも、母さまのようになれるでしょうか？）

わからないけど、一生懸命頑張ろう。

そして、母さまにはその分、ゆっくり休んで元気になってもらい

ましょう。

（うん、とてもいいかんがえです）

5歳の春。

まずは「転ばない」「や」「どこにでも凭れない」「よう注意を払う努力をする、という発想を持たなかったわたしは、一人青空に誓ったものだっただ。

+ + + + + + + + +

さて。

「おそいです」

わたしは門柱の横に立ち、ムツと口元を歪めながら学園の方を睨みつけた。

（はやくかえりたいのに。いったい、なにをしてるんでしょう）

いつそのこと、先に家に帰ってしまいませんか。

そう考えたりもしたけれど、

『いいかい、ダフネ？ 外にはね、危ないことが数え切れないほど沢山あるんだ。君みたいに小さくて、奇跡的な可愛さの女の子が独りで歩いたりするなんて、以ての外だよ？ 初めの一年間は、学園の登下校は父さまか、父さまがお願いした他の誰かと一緒にしようね』

絶対だよ、と頬をくっ付けてスリスリしてくださった父さまとの約束を思い出して、ぐっと堪える。

父さまとの大切な約束を破るわけにはいきません。

……ああ、でも早く帰りたいのに。

（エイロスにいさまってば、ひどいです）

わたしは短い腕を組んで、髪と同じ水色の眉を顰めた。

今日は、いつも迎えに来てくれているメイドのエリスがお休みの日。

朝はほとんど父さまが連れて行ってくださっているのだけれど、学園が終わった午後の下校時間は、そうもいかない。だから、父さまの代わりに、エリスが校門まで迎えに来てくれることになっているのだけれど……。

『今日は、エリスの代わりにエイロスが送ってくれることになっているからね』

今朝、いま立っている場所でわたしを見送ってくれた父さまは、そうおっしゃった。

エイロスこと、エイロス・アモルは、父さまのお友達の息子さん。

彼曰く、わたしのことを赤ん坊の頃から知っているだとかで、良く家にも遊びに来てくれる。

二つ年上で、先にこの学園に入学していたエイロスは、この一カ月の間ですでに2度ほど、ダフネの下校に付き添ってくれていた。だが、

「どうせ、またよりみちしてるにきまってます」

初めての待ち合わせをした日と、2回目の日のことを、わたしは忌々しい気持ちで思い起こした。

まず、一日目。

三十分遅刻した理由を、エイロスは「飼育小屋のコカトリスが生んだ卵の様子を見に行ってた」ためだと宣った。

……まあ、これは彼がその学期の生き物係であつたため、仕方がないでしょう。

次に、二日目。

四十五分遅刻した理由を、エイロスは「親友の代筆でラブレターを書いていた」ためだと宣った。

……らぶれたー、って何でしょう？

分からなかったので父さまに聞いてみたのだけど、

『ダフネには関係ないものだよ。……もし、この先そっという名前のついた“物”を誰かから押しつけられたら、父さまにすぐに渡すんだよ？ 父さまが、ちゃんとして“片付けて”あげるからね？』

そっおっしゃって笑った父さまの顔が、いつもと何か違うような気がしたので、それ以上深く聞けなかった。

ラブレターが何なのかは、結局良く分からなかったけれど、要するにわたし以外のお友だちとの約束をエイロスは優先したんだなって考えると、とっても面白くなかった。

（きょうは、どんな『りゆう』をいうつもりでしょうか？）

青い空に浮かぶ一片の白い雲が、わたしの上に影を落とした。制服に包まれていない首筋から、すうっと温度を奪われる。

ふるりと身体を震わせたわたしは、こんなさむい思いをしているのも、ぜんぶエイロス兄さまのせいです、と恨みを着々と深めながら、口をへの字に曲げた。

早く来ないかな。

来てくれたら、お茶の時間に間に合うのに。

エリスが昨夜のうちに用意してくれたイチゴのパイを、エイロスと一緒に食べようと楽しみにしていたわたしは、ひとり剥れて俯いた。

今思えば、数少ない友達　しかも、兄のように慕う幼馴染が、自分じゃない他の友人と仲良く遊ぶことに対して、やきもちを妬いていたのだと思う。

……大人しく認めると、本人がもの凄く付け上がるに違いないので、絶対に口にはしないけれど。

生来、人見知りが激しく、おまけに学園に入るまで、生まれ育った屋敷から碌に出たことのなかったわたしは、友達を作るのがとても下手だったから。

「おーい、ダフネ！」

待つこと一時間。

最強に無神経な彼は、ぶすつとした顔で仁王立ちするわたしの方へ、陽気に腕なんぞ振りつつ駆け寄って来た。

ああ。

いつも通り、キラキラと無駄に輝かしい金の巻き毛と、穢れを知らないブルーの瞳。

「ダーフネーっ」

喜びに満ちた、元気いっぱいの声。

白い制服の大きな襟を風にたなびかせながら、軽やかに走るその姿を見て、

「きゃあつ、エイロス君よ！」

「いやーん。今日も天使みたいにステキー！」

「かわゆーいっ」

上級生やら下級生やら嫁き遅れの先生やらが、無邪気で愛らしいエイロスの容姿に、頬を染めて歓声を上げた。

まるで絡み捕ってやろうとでもいうような、熱くてネバついた視線もなんのその。

通常通り、最高水準のKYスキルでスルーして、彼は背に純白の羽を背負っているかの如きさわやかさで、こちらにやって来る。

……まあ、たしかにエイロスは、女の子のわたしから見ても可愛いですけど。

前に本人にそう言ったら、「まあねー。でも、ダフネの方がとびつきり可愛いよ？」と、天使然とした笑顔で頬ずりされたことを思い出し、イラっとした。

そのように、わたしが自己稼働でイライラを量産中であることを、彼が知る由もなく。

「ダフネっ」

花びらを飛ばす勢いでわたしの前に降り立った天使さまは、世界で一番の幸運を得たような微笑を浮かべた。

「遅くなってごめん。おまた　　ブフッ」

「ええ、まちました。とつても」

地べたに沈む天使さま。

通学用の茶色いバックをエイロスのお腹に見事炸裂させたわたしは、ふんつと長い髪を振り回す勢いでそっぽを向いた。

「わ、悪かったって、ダフネ」

石畳に尻餅をついたエイロスが、上目づかいに手を合わせながら、
氣まずそうに詫びてきた。

……さすがに、本気で悪かったと思っているのでしょうか。

一応、キング・オブ・ノウテンキな彼でも、反省することがある
ようです。

しかし、ここですぐに赦してしまえるほど、乙女の一時間は安く
もない。

「しりません。にいさまなんて、きらいです」

殿方に待たされた女の子の礼儀として、つーんと横向きの姿勢を
保つ。

「こんなにまたせるなんて、ひどいです」

「ごめんなー。ダフネと同じ新入生にクラブ棟の案内をしてたら、
つい遅くなっちゃってさ。あはは」

「いいですよーだ。わたしのことなんて、そのままわすれちゃえば
いいです。わたしはひとりでちゃんとおウチにかえって、エリスの
イチゴ・パイをたべますから」

「え、今日のおやつ、エリスさんのパイなの！？ らっきーっ」

喜びの声を上げて立ち上がったエイロスを見て、わたしははっと
した。

「だ、だめですっ。エイロスにいさまにはあげません！」

「いや、それは断固認めないから」

キパツ、と鮮やかに言い切った彼からは、もはや反省モードが欠
片も見出せなくなっていた。

さっきまでの謝罪はなんだったのでしょうか。

「ちょ、にいさまがきめることじゃないでしょー！？」

「いいや、もう決定です」

「だめったらだめですッ！」

「ははは、そんなこと言っても無駄無駄。ダフネは僕のことが大好
きだから、そんな意地悪はできないね」

やけにはつきりと、そんなことを面と向かって言うものだから、わたしは思わず怯んでしまった。

なんて恥ずかしい生き物なんだろうかと、このひと。

「な、なな、なにきいてたんですか。さっきから、きらいだっていつてるでしょうっ」

「ふふーんだ。無理するなつて。大好きな僕と一緒に食べるおやつは、きつと格別だよー？ ほら、にいさま大好きって言うてごらん？」

「……うう」

確かに、ひとりで食べるおやつより、エイロスと一緒にの方が断然美味しい。

「……うう……」

「ほらほーら、“だーいすき”つて、ひとこと言うだけだつて」

簡単だろう？ と可愛らしく傾けられた金色の頭。

でも、愛くるしいその表情に浮かんではいるのは、天使に有るまじきニヤニヤとした笑みで。

「い・い・ま・せーんツ！！」

しつこくからかってくるエイロスに向かって、わたしは思わず絶叫した。

その声が、思いのほか周りに響いてしまつて。

通りすがりの上級生のお姉さんたちにクスクスと笑われてしまったわたしは、真っ赤になつて彼を睨み上げた。

「わたし、にいさまにはもう、ぜったいぜーったい、やさしくなんてしてあげないんですからっ」

そう言いつつ、あれ、と思う。

何故でしょう。

わたしを覗き込んでいるエイロス兄さまの姿が、急に曇ってゆらゆらしてます。

一方、わたしの瞳のダムが決壊しそうだと気が付き、マズイと判断したらしきエイロスは、慌てた様子でまた謝り始めた。

「にいさまのばか。ばかばか、おたんこなす！」

ほかほかと繰り出されるわたしの拳攻撃にも、大人しく甘んじている。

「まーまー、そろそろ赦してくれよ。あ、ほら！ お詫びにこれをあげるから」

え、お詫び？

その言葉に釣られて、いそいそと近寄った欲深いわたしに、エイロスは自身満々の笑みを浮かべた。

そして、僕のとっておきだぞー、とにこやかに彼が取り出ししまったるは……。

「な、なんですか！？ その濁った透明のビロビロ」

不気味に白濁した、ぶ厚いゴムの様な“ナニカ”。

ごきげんなエイロスは、胸を張って自慢気に、それを掴んだ腕をわたしの方に突き出してきた。

「聞いて驚け！ なんとこれ、バジリスクの抜け殻なんだよ！ 脱皮したばかりなのを、この間みつけてさー。凄いだろっ。これを持ってる和金持ちになれるんだって、じーちゃんが言ってた。ほらダフネ、鞆に入れて、」

「いやいやいやいやいやあああーっ！！ かばんにさわらないでくださいいいいっ！ ちかよらないで、はなしてーっ！」

「えー？ せつかなんだから、遠慮するなよ。ほら」

「ぜったいいいやああああー！！ もお、エイロスにいさまなんか、だいつきらいですっ」

「そんなこというなよー。さみしいだろ？」

あはは、と笑うエイロスから、わたしは半泣きで距離を取った。待ちぼうけを食わされた上に、何でこんな目に合わなきゃいけない

いでしょう。

というか、初めて遅刻してきた時間が三十分で、次が四十五分、それで今回が一時間？　なぜ、きっかり十五分ずつ待ち時間が増えているのだろう。

……この計算で行くと、次の待ち時間は一時間十五分？

（もう二度と、エイロスにいさまとはかえるやくそくなんかしません）

幼いながらも心に固く誓ったわたしだったが、約束してきたのは父だったということをすっかり失念していた。

03（前書き）

お気に入り登録&評価をして下さった皆さま、およびメッセージをくださった皆さま、本当にありがとうございます。

11/14 誤字訂正いたしました。お知らせ下さってありがとうございます。

「ほら、もう仕舞ったから。そろそろ帰ろう、ダフネ」

「……………」

「いいかげん、機嫌直せよー。あんまり遅くなりすぎちゃうとさ、クレウサおばさんが心配するぞ？」

「だいたい、なんであのお宝の価値がわかんないかなー、などとほざくエイロス兄さまの手を、わたしはしぶしながら握った。」

母さまの名前を出されたら、仕方がない。こちらが折れるしかありません。嗚呼、なんて大人なんでしょう、わたし。

……でも、そもそも遅くなったのは、兄さまのせいじゃないですか。

歩きながら、先ほどの“お宝”について熱く語ることを辞めないことにもイラリと来たので、とりあえず繋いだ手の甲にざっくり爪を立ててみた。

「もっとはやくあるきましょう、にいさま。このままだと、ひがくれちゃいます」

「えー、おおげさだなー。早く歩き過ぎると、また転ぶぞ？ それより、なんか手が痛いんだけど。爪立てたまま引つ張るなよ、ダフネ」

「痛い、と言いつつ、何故だか妙に楽しそうな兄さまの態度にムツと眉間の皺を寄せながら、わたしは更にグイグイと彼の手を引つ張った。」

「いつもこうです。」

わたしは怒ってるのに、兄さまはそれを分かってくれない。

「喜ばせようとしてるわけじゃないんだから、嬉しそうにしないでください。」

そう思っているのに、「あはは、ダフネはやっぱりかわいいなあ」などと、手を引かれながら後ろで言うその無神経さに、

（ちいさい子にするみたいにしなくてください　　ッ！！）

歳下だからって、嘗めんじゃないです！　これは一矢報いるべきでしょう！

わたしは牙を剥かんがため、勢いよく後ろを振り返った。

その時だった。

「せんぱい」

綺麗な声。

身の内の怒りが一瞬にして掻き消される。

（だれ？）

聞いたことのない声。

でも、たぶん、わたしと同じ歳くらいの子供の……。

まるでそうすることが定められているかのように、わたしの視線は声の主を追った。

その先で、

真っ先にわたしの目を浚ったのは

紅。

透き通る陽光の下、鮮烈なまでの紅色の髪が目眩しくて、わたしは思わず両目を細めた。

（わあああ）

声に出せない感嘆。

なんて綺麗なんだろう。

わたしたちのすぐ後ろ、ちょうど校門から出てきたばかりと見える一人の男の子が、こちらをまっすぐに見つめていた。

なんというか……すごく、すごくカッコいい子だ。

まん丸でプクプクなわたしの頬つぺたとは違う、ふくつくらはしてるけど、整った線を描いている顔の輪郭。炎のような紅の髪と宝石みたいな金の瞳は、これ以上ないほど艶やかに陽の光を弾いている。

すつとした整った面立ちは、この前、母さまに見せて頂いた絵本に出てきた美の女神さまに似ているような気がした。

でも不思議。

それでも、女の子には全然見えない。どこからみても、ちゃんとした男の子。

……うわあ。

すごい。こんな子、見たことない。

わたし以外のひともしうなのか、さつきから下校途中の子たちが彼を見て呆けたように足を止め、人集を作り始めている。

こういうのを『神がかり的な』って言うのかな、なんて読んだ本の中に出てくる、大人っぽい言葉を使ってみることに夢中だった小さなわたしは、人生で初めて実感した“感動”に、胸をときめかせた。

自然と、頬も緩んで笑顔になる。

最も、そんなわたしとは裏腹に、向かい合っているその男の子はどこか不機嫌そうだったのだけれど。

子供らしからぬ、冷気を帯びた黄金の瞳。

(え？ あれ？)

背筋を冷たいものが駆ける。

向けられた視線が嫌に痛く感じられて、わたしは本能的にエイロス兄さまの後ろに隠れた。自分でも、どうしてそう動いてしまったのか分からない。

な、なんで隠れなきゃいけないんでしょう？

内心、首を傾げたのだけれど、それでもわたしの手は無意識に兄さまの制服の裾を、まるで縋りつくかのようにきつく握りしめていた。……ほんとうに、なんで？

まごまごビクつきながら顔を逸らしたわたしを、何故か眇めた目で一瞥した彼は、そのままわたしの手前 エイロス兄さまへと視線を移す。

その途端、

（あ、なんだか息苦しいのがマシになりました）

背筋の悪寒も納まり、わたしは慌てて大きく息を吸い込んだ。

ああ、苦しかったー。

……っていうか、あれね？ わたし、もしかして今、息も止めちゃってたでしょうか。

うーん、なんででしょう。

全く以って、わけがわからない。

「ああ、ヘリオスじゃないか。どうかした？」

のんびりとした口調で問い掛ける兄さま。

天使と太陽王子のコラボよーっ、とどこかで黄色い声上がる。

熱気を帯び始めた周りの空気なんてなんのその。マイペースな調子で緩んだ笑顔を浮かべ続けている幼馴染を、わたしは呆れた顔で見上げていた。

時々、あなたが最強なんじゃないかって思う時があります、兄さま。尊敬はしないけれど。

「なにに？ あ、もしかして、まだ聞いておきたいことでもあった？」

にこやかに、小首を傾げながら問う兄さま。

周りからまた「かわいーっ」と甲高い歓声が上がるのを耳にしなから、騙されちゃ駄目ですよ皆さん、とわたしは心の内で叫んだ。

このひとは、どの角度で首を傾げる自分が最も可愛いく見えるかを、常日頃から研究しているような人間なんですよ！ わたしという間中、「今の僕、可愛かった？」と確認してくるような堕天使な

んですよーっ!?

残念ながら、その絶叫が乙女たちのハートに届くことは無く……。

「ああっ、二人で並んでるともつと素敵ねー」

「わたしも弓部に入っちゃおっかなー」

「えー、じゃあ私もっ」

きやあきやあとはしゃぐ女の子たちの会話を耳にして、わたしはようやくそのことに思い至った。

(ああ、そう言えば……)

今日の兄さまの遅刻理由は『クラブに新しく入った後輩の案内』だった。

エイロスが所属しているのは、アーチェリー・クラブ 弓部。

兄さまはこう見えて、弓の名手なのだ。いつもホニヤホニヤしていらっしやるから、すっかり忘れてしまいそうになるのだけれど。

良く見れば、男の子の肩にも弓の道具を持ち運ぶための専用ケースが掛けられていた。きっと、今日案内したという新入部員は彼のことだったのだろう。納得です。

「および止めてすみません。あしたからのクラブの活動について、少し確認させていただきたい点があったので」

“ヘリオス”と呼ばれた、超絶美人さんなその男の子は、わたしと同じ五歳の新入生とは思えぬほどしっかりとした態度でそう言った。
「ん、いーよ。なにかな？」

「ありがとうございます。ではまず、射法の練習についてですが……」

ヘリオスは、はきはきとした口調で質問し始めた。

その姿を、わたしは相変わらず兄さまの陰に隠れたまま、黙って見つめる。邪魔になってはいけないので、ひたすらじっとして。

それにしても、

(ほんと、すごいんですね……)

堂々とした会話の運びと、まっすぐに相手に向けられた眼線。噂通りな子だと、わたしは感心しながら吐息を吐いた。

新入生のヘリオス・アポロン・オリュンポス。

ホントのことを言えば、わたしは、この男の子のことをちょっとだけ知っていた。

でも、初対面。

それは、ホントにホント。

遠目にしか、見たことがない。

というか、たぶん、わたしがこの春から通っている学園で、彼のことを知らない人間なんて居なかっただろう。

容姿の際立った美しさもさることながら、入試時に受けた能力検定の成績は断トツのトップ、しかも真正正銘、生粋の王子様。

春の入学式。

大講堂のエントランスに彼が現れた瞬間、その場にいたすべての者が一瞬にして目を奪われた。

……もちろん、わたしだって。

見たことがないほど大勢の人間が集まっていることに怯え、ぐずって父さまを困らせ始めていたわたしの涙も、背を正し、向けられた夥しい量の視線も物ともせず顔を上げ続けていた同い年の男の子の姿に圧倒されて、どこかへ吹き飛んでしまった。

あの日、みんなの心を攫ってしまった太陽の王子様。

好きになってしまったと騒ぐ女の子は、同じ新入生だけでなく、上級生のお姉さま方の中にも多いらしい。わたしのクラスの子も、かつこいいよねー、と頬を上気させて話していた。

わたしには、まだみんなが楽しそうに語る「恋」がどんなものなのか、全然わからないのだけ。

それでもあの日、ヘリオスのことを“カッコいい”と思った。

女の子たちが好きだという、王子様のような容姿を、ではない。落ち着いていてどんなことにも動じない横顔と、金色の瞳に湛えられたしつかりとした意思が、ひどく尊いものだと感じたのだ。

それはたぶん、甘やかな恋ではなく、強い憧れ。

甘ったれの自分にはない彼の高潔さに、わたしは魅了されたのだ。

「おい、ダフネ？」

聞き慣れた呆れ声とともに、ぽん、と頭の上に置かれた手。

はっと我に返ったわたしは、慌ててその手の主を振り仰いだ。

「何ぼーっとしちゃってるんだよ」

につこりとしたエイロスに覗きこまれ、わたしは目をぱちくりさせた。

「へ？ わたし……」

「駄目だなー、そんな簡単に男に見惚れてるようじゃさ。安い女の子になっちゃいけないぞ、ダフネ」

「み、みとれてなんかいません！」

両頬を引っ張りながらそんなことを言ったりしちゃう兄さまに、わたしはギョツとして顔色を青くした。

衆人環視で何を言い出すんでしょう、この破廉恥天使は！

「にいさま、いいかげんなことをいわないでくーだーさーいーっ！ほっぺもはなしてっ」

「んー。じゃあ、なんでヘリオスのことを穴が開くほど見詰めてたのかなあ？」

「そ、それは……」

「それは、なんだい？」

言っでごらん、と頬をさらに横に伸ばしながら、エイロスはいつこりと微笑みを深めた。

ん……何ですか？

笑っていらつしやるはずなのに、目がすつごく怖いですよ、兄さま。

だいたい、こんな大勢の人に囲まれてる中で、言えるはずなんてないじゃないですか！

（お、おともだちになってほしいな、なんて）

……嘘です。

みんなの前じゃなくなつて、わたしには言えっこないです。無理。

「ほーら、言いなよ。じゃなきゃ、顔がビロビロに伸びちゃうぞー」

「いやーでーすーッ！」

絶ッ対に黙秘です。

あはは、柔らかいなーと頬を伸び伸びさせ続けているエイロス兄さま。……楽しそうでいいですね。

空気や状況が読めないのはいつものことですが、それにしたつてしつこ過ぎでしょう。

……あの子のこと、放っておいていいんですか？

おそろおそろ横目でヘリオスの様子を窺うと、彼はさっき兄さまと話していた時とは全く違う、感情の窺えない表情で、わたしたちを見ていた。

その無の美貌の中、黄金に湛えられた冷氣だけが、暗くわたしを射抜く。

ぞくりと、再び背を駆け抜けた嫌な悪寒。

「ダフネ？」

急に抵抗を止めて大人しくなつたわたしを不審に思ったのか、頬

から手を離れた兄さまが顔を覗き込んで来た。

間近に迫った似非天使の顔面に、わたしは両手の平をバシッと当てて、これ以上の接近をガードする。

「もー、なにするんだよー。人が心配してやってんのに」

「ちかすぎです。あと、やっぱりきらいです、にいさま」

「あ、またそんなこと言う。せつかく心優しい僕が、友達の少ない可哀想なダフネに、ヘリオスを紹介してやろうと思ってたのに」

「えっ？」

なんですって？

「ほら、お前たちって同じ学年だろ？ あ、でもクラスは違うんだっけ」

「……………」

無言のまま向けられ続ける、射るような金色の視線。

友達になれるよう、紹介してくれる　その言葉に浮かれかけたわたしの肝を一瞬にして凍結させてしまえるほどの威力が、その目にはあった。

（な、なんで？）

何で、さっきからそんなに睨むんですか？

怖くなったわたしは、喉を鳴らして小さく後退る。

「おーい、何凄んでるの」

にぶにぶな兄さまでも、わたしたちの異常な空気に気が付いた。ということとは、これは余程の状態ということですよ？

「凄んでなどいないです」

「はあ？　まあ、別にいいけど」

いいえ、ぜんっぜん良くないでしょう！

そう叫び唱えた、内なるわたしの異議を知ってか知らずか（恐らくは後者であろう）、

「とゆーわけで、ヘリオス、この娘はダフネだよ」

この状況で、そう笑顔で繋げられる兄さまは、天使じゃなくて悪魔だと思う。

「……………誰？」

「え？ だから、“ダフネ”だって。俺の幼なじみなんだ。宮廷魔導士のペネイオス・テッサリアって知らない？ この子、あのひとの娘だよ」

「ペネイオス 水の錬命士 の？」

父さまの名に目を見張ったヘリオスは、すばやくこちらに視線を走らせた。

そんなに驚くことなのでしょう。

いつも冷静な彼が いえ、いつも見張っているわけじゃないので、ホントはよく知らないのですが 、双眸を見開いてわたしを凝視している。

父さま、有名なんです。さすがです。

嬉しくなつて、ゆるゆると微笑みかけた、その時、

「……………こんなやつが？」

その一言に、わたしの全身が凍りついた。

『 こんなやつ 』

（いま、わたし……………）

そう、言われました？

「おい、そんな言い方はないんじゃない？」

いつもみたいに笑みを含んでいない、ちよつと低めの声でエイロス兄さまが何か言ったような気がしたけれど、わたしの頭にはきちんと入って来なかった。

だって……………だって、懂れていたひとに、わたし

、

「こんなやつ、はないと思うけど。女の子に対してさ」

「“こんなやつ”は“こんなやつ”で十分ですよ。 せんぱい、

失礼ですけど、コイツに騙されてるんじゃないですか？」

「は？」

「こんなのと幼馴染だなんて……しんじられない」

「お前、なに言ってる……」

汚いものを唾棄するがごとく吐き捨てた、そんな後輩を諷めようと、兄さまが声を荒げかけた次の瞬間、

「せんぱいほどの方が付き合うような価値、ないと思いますけどね」

そう言葉にして、彼は、笑った。

それは、わたしが初めて見た、彼の笑顔。

とっても綺麗で、

とっても醜悪な、

わたしただ一人のためだけに向けられた

嗤^{わら}い顔。

「なあ、おまえ……」

絶句している兄さまを余所に、紅の王子様がゆったりとわたしに語りかける。

一歩、踏み出された彼の足。

もう一歩、二歩、三歩……。

彼が近づく分だけ、わたしの身体も後ろに下がった。

エイロス兄さまの制服の上着から、掴んでいた手を放す。

護ってくれていた見慣れた背中から、追い出されるように離れる。

こわい。

彼が、ヘリオスが、怖い。

小刻みに震える身体を、がくがくする両脚で必死に支えながら後退るわたしは、それでも彼の双眸から視線を外すことが出来なかった。

細められた、カスティール・ゴールド金色の目。

身を切り裂くような凍てつきとともに、全身を嘗め尽す熱をも宿した不思議な瞳。

その引力に囚われ、わたしは彼から顔を背けることを禁じられた。

「ほんとうに、」

だから、彼のそのひとは、

わたしの魂に、くつきりと刻印を焼き付ける。

「見下げた屑だな、お前」

ほら、
ね？

03（後書き）

次回の更新は、1～2週間の間を目安にしております。
宜しく願います！

*** 閑話* 約束（前書き）**

拍手&感想コメント、および評価をくださった皆さま、本当にどうもありがとうございます！

今回は、前のエピソードから省いた小話です。

『母と娘、ちょっとだけ父。』の回想。

* 閑話 * 約束

「おめでとう、ダフネちゃん。とっても良く似合ってるわ」

入学式の日、母さまはそう言って微笑んでくれた。

ベットから身体を起こし、部屋に入ってきたわたしを眩しそうに見つめた母さま。

白い生地の新しい制服を着たわたしは、大好きな母さまに抱きついたまま、にっこりと笑って見上げる。

母さまはとても身体が弱くて、わたしが物心ついた時から、ベットから離れられなくなることが、多々あったように思う。

パルナツス魔導学園にわたしが入学するこの日も、母さまはお医者さまから外出をきつく禁じられていた。

せつかくの入学式だし、母さまにも来て欲しい。

でも、駄目でも良かった。

母さまが、本当はとても行きたいと思ってくださってることを、十分に知っていたから。

むしろ来てくれないことよりも、母さまが「ごめんね」と謝って悲しそうな顔をする方が、断然嫌だった。

「あらあら、ダフネちゃんったら。今日から魔導士学生になるっていうのに、まだ甘えん坊さんなままなのね？」

きゅっと抱きついたままだった幼いわたしの頭上で、面白がるように、でもひどく甘やかすように洩らされた問い。

「ちがいますっ！ おうちをでたら、わたしはちゃんとおねえさん

になるんです。でも、いまはまだ、母さまといっしょだから、おねえさんにならなくていいんですもん」

「まあ、本当？　本当にお姉さんになれるのかしら、わたしの可愛い泣き虫さん？」

ぷう、と頬を膨らませたわたしは、ふかふかな母さまの胸にぎゅつと顔を埋めた。すりすり頭を擦り付けるわたしの水色の髪を撫でながら、母さまがくすぐったそうに笑う。

「ほんとうにほんとうですっ。おそとにでも、きょうはぜったいにならないです。父さまにダッコもしてもらいません」

「あら、我慢出来るのかしら？」

「できるったらできるんですっ。おねえさんはダッコなんかほしがったりしないんですっ」

「え、そうなのかい？　抱っこさせてくれないのかい、ダフネ」

わたしたち二人を見守りながら椅子に腰かけていた父さまが、急に腰を上げたかと思うと愕然とした面持ちでわたしの腰に手を添えてきた。

今日、入学式に付き添いで出席してくれる父さまは、濃緑色をした式典用の正装をパリッと着こなしていて、すごく素敵だ。お顔もとってもハンサムなので、まるで本の中から抜け出てきた王子さまみたい。

母さまと同じくらいに、大好きな父さま。

いつもなら、すぐに胸に飛び込んで、ぎゅつと抱きしめて貰う。

だけど、

「ほら、ダフネ。こっちにおいでー」

「いやです。きょうは、父さまのダッコはなしです」

ぷいっつと顔を背けると、腰に当たった父さまの両手が、雷撃を受けたみたいにビクリと引き攣った。

心配になって、ちよつとだけ様子を窺う。

すると、ちよつとお口元がフルフルしてるけど、相変わらずにっこりなさっていたので、わたしはほつと安堵の息を吐いた。……そ

の見解が正しかったのかどうかは分からないけれど。

「だ、ダフネ。もしかして、父さまの抱っこ、嫌いになっちゃったのかい？」

「そうじゃないです。でも、きょうはおやすみなんです」

「ええ！？ 父さまは、ダフネを抱っこして校門の前で写真を撮りたいなあ。ダフネは学園の近くに行ったことがないから、校門の彫刻アーチを見たことがないだろう？ すごく綺麗だけど、私の可愛いダフネは、小さいから良く見えないかもしれないな」

「……う。でも、でも、ダフネはもう小さい子じゃないから、おともだちのまえでダッコなんて……」

「父さまが高い高いしてあげたら、良く見えると思うんだけどなー？」

「ううー……」

「な？ だからほら、ダフネー」

「あなた、もうお止めなさい」

躍りになって、自分の腕の中に娘を誘き寄せようとしていた父さまの頭を、母さまが平手で叩き打った。

「だ、だが、クレウサ。せっかく、私たちの可愛いダフネの人生の門出だつていうのに」

頭を押さえてそう訴えつつ、往生際悪く縋りつこうとする父さま。わたしを庇うように抱きしめた母さまが、しっし、とばかりに父さまを片手で追い払った。

「言葉の用法がおかしいわよ、ネイス。結婚式じゃないんだから」

「結婚！？ 馬鹿言っちゃいけないよ、ダフネは未来永劫誰にも嫁になんてやらないよ？」

「あーはいはい。ほどほどにね？ そのままじゃ、ダフネが年頃になったときに、『うざい』って、嫌われちゃうわよ？」

「そんなことないよなー、ダフネ？ 父さまのこと、ずっとずーつと大好きだもんなー？」

「はい！ 父さまのこと、だいすきですっ」

「ほらクレウサ、訊いたろう！？　ダフネは世界中の男の中で、私のことを永遠に一番愛してるって！」

「あーもー、あなたが曲解の天才だっていうことは、十分に分かったから。ネイス、悪いけど少し黙ってて？」

「ちよ、ひど！　私は君のことも存分に愛して」

「だ・ま・っ・て・て！　って、言ってるでしょう？　あー、うざ」
「……………」

しゅん、と大人しくなった父さまからわたしへと視線を戻された母さまは、ご自分の膝から、わたしを床の上に下ろし、真っ直ぐに立つように言った。

「いい、ダフネちゃん？　今日、あなたは外の世界に初めて触れることになるわ。それはとっても素敵なことだし、怖いこともある。わかるかしら？」

「え、おそと……こわいんですか？」

「そう。でも、それだけじゃないわ。さっき言ったように、素敵なことだって一杯あるし、楽しいことも沢山あるの。それは、お家中だけじゃわからない、外に出てみなければ知ることの出来ないことよ。今までは、父さまや母さま、エリスがいつも守ってあげられただけど、これからは違う。欲しいなと思ったものは、ダフネちゃんが自分の足で探して、自分の手で捕まえないといけないし、恐ろしいと感じたものは、自分の力で退けなきゃいけないの」

「や、こわいのいやです！　わたしだけでやっつけるなんて、きつとできないです」

「そうね。ダフネちゃん“だけ”だったら無理かもしれない。だからね、ダフネちゃん？　助けてくれるお友達を見つけなさい」

「お……とも、だち？」

「そう、友達。これも素敵で楽しいものの一つかしらね」

ふふっ、と母さまは微笑みながら、数えるように指を立てておっしゃったのだけれど、わたしは同じように笑みを返すことが出来なかった。

（わたしと、ともだち……なってくれる子、いるでしょうか）

極度の人見知りであることを、常日頃、墮天使のような幼馴染にからかわれ続けてきたわたしにとっては、ひどく難しいことに思えて……。

自信無く俯いたわたしの心の内を察してか、母さまは顔にほんのり苦笑をのせて、わたしの髪を優しく梳いてくださった。

「あらあら、なにも大勢作るのは必要はないのよ？　まあ、居たに越したことはないのだけど」

「でも……」

「大丈夫。きつと、見つかるわ。ダフネちゃんと“本当の”友達になってくれる子が」

「ほんとうの？　おともだちには、うそのおともだちもあるんですか？」

「そうね、残念ながら」

「どうしたら、“ほんとう”のおともだちか、“うそ”のおともだちかわかるのでしょうか。……わたしにはわからないかもしれないです」

「うーん、たしかに難しいわね。　あ、じゃあ、こういうのはどうかしら？　あなたが怖い目にあつたときに助けてくれた子が居たら、その子には絶対に言うようにするの！　『わたしと、本当のお友達になってください』って。その子は、きつと本物だわ」

「あー！」

「ふふっ、名案でしょ？」

「はいっ。母さまはてんさいです！」

「でしょでしょー」

「……だけど、クレウサ。その場合、私たちの可愛いダフネがピンチに陥ることが前提になるんじゃない？」

「ネイース。あなたはだ・ま・っ・て・て、って言ったわよねー？」
「……………」

またもお口を閉ざしてしまわれた父さまを余所に、母さまは続

ける。

「ねえ、ダフネちゃん。一つだけ、母さまとお約束出来るかしら？」

「おやくそく？」

「そう。　　もしも、本当の友達が出来たときにはね、あなた自身もその子の本当の友達でいられるような心を持たなくては駄目よ？　助けられるだけじゃなくて、助けようとする人で在ろうとなさい。結果が伴わなくてもいいの。ただ、一緒に頑張つて困ったことを乗り越えようとする気持ちを持つことだけは、忘れないで欲しいわ」

よ。
それが、あなたを守る、なによりの力になってくれるはず

+
+
+
+
+
+
+
+
+
+

あの日、柔らかな額を寄せ合つて、祈るように伝えられた教え。

約束、という言葉に応じた自分の頷きも。

それを温かく見守ってくれた、母さまの慈しみに満ちた眼差しも。

ずっと、ずっと、

わすれません。

*** 閑話* 約束（後書き）**

初めての閑話なのに、ヒーローネタが全く含まれていない辺りが、自分でも酷いと思います。

次回は本編へ。

更新は1〜2週間以内になりますので、宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5830x/>

だって、だいきらい。

2011年11月21日10時10分発行